



文／藤井明広（横須賀市自然・人文博物館）

第5回 引揚港としての浦賀

昭和20年(1945)8月、日本はアメリカ・イギリスなど連合国との戦争である「アジア・太平洋戦争」に敗戦しました。日本が敗戦した当時、海外(特にアジア地域)には約660万人(軍人330万人・民間人330万人)以上もの日本人が取り残されていました。これは当時の日本の総人口7200万人の約1割に相当します。本号では、こうした海外に取り残された日本人の帰還事業について、特に引揚港となった浦賀の動向について紹介したいと思います。なお、軍人の日本への帰還を「復員」、民間人の帰還を「引揚」といいます。

昭和20年(1945)9月、日本政府は海外に取り残された日本人を故国へ帰還させるため、横浜(神奈川県)・浦賀(同左)・舞鶴(京都府)・呉(広島県)・下関(山口県)・仙崎(同左)・門司(同左)・博多(福岡県)・佐世保(長崎県)・鹿児島(鹿児島県)の各港を「引揚港」に指定しました。浦賀が引揚港に指定された背景には、帰還者向けの宿泊施設として旧軍施設が利用可能であったことや備蓄物資が充実していたことなどがあったとされます。

その後、同年11月には浦賀・舞鶴・呉・下関・博多・佐世保・鹿児島に「地方引揚援護局」、横浜・仙崎・門司に「出張所」を設置して復員・引揚業務が開始されました。浦賀では陸軍・海軍・神奈川県の復員・引揚業務を担う各機関を一元化する形で「浦賀引揚援護局」(厚生省管下)が設けられました。以後、昭和22年(1947)5月に同局が廃止されるまでに約56万人もの帰還者が浦賀から戦後の再出発を果たしています。これは博多(約139万2千人)、佐世保(約139万1千人)、舞鶴(約66万人)に次ぐ全国4位の帰還者数でした。

浦賀への帰還第一船は、昭和20年(1945)10月7日、飢餓寸前の状況にあったミレ島(マーシャル諸島)からの陸海軍人約2500人を乗せて入港した「氷川丸」(現在は横浜市の山下公園に係留されている)です。帰還者たちは3、4日の事務手続きや未支給給与などの受け取りを済ませ、最寄りの駅から懐かしい故郷へと向かいました(【図1】)。しか



【図1】国鉄横須賀駅(現・JR横須賀駅)から帰郷する復員兵
〔米国立公文書館所蔵、横須賀市立中央図書館郷土資料室提供〕

し、特に南方戦線からの帰還者の中には、長期間に及ぶ飢餓状態の影響から上陸前後に死亡する者が後を絶ちませんでした。彼らは帰還した遺骨とともに市内寺院(浦賀の乗誓寺、久里浜の長安寺)に安置所を設けて供養されました。

さらに、昭和21年(1946)4月5日には、中国広東から浦賀港へ入港したリバティー輸送船VO75で多数のコレラ患者が発生するという事件がありました。コレラとは、コレラ菌という細菌によって引き起こされる感染症であり、激しい下痢や嘔吐の症状により、多くが栄養失調状態にあった帰還者の命を脅かしました。その後も、中国広東方面からの船が続々と入港しましたが、すべて海上で隔離措置が取られました。同年6月4日に最後の海上隔離が解除されるまでの約2か月間、入港した汚染船舶は20隻、乗船者6万7326名、そのうちコレラ患者478人(うち死亡70人)、揚陸死体141体に及んだとされています(【図2】)。

なお、こうした過酷な現場にあって浦賀が引揚港としての役割を果たした背景には、検疫業務に従事した医療関係者、そして敗戦直後の混乱の中で世界各地に取り残された日本人の救出にあたった引揚・復員船乗組員の存在があったことも記憶・記録に留めたい歴史といえるでしょう。



【図2】引揚者の供養塔(久里浜少年院内)〔令和7年(2025)1月8日、特別に許可を得て筆者撮影。一般非公開。〕

【参考文献】

- 引揚援護庁長官官房総務課記録係編『引揚援護の記録』(引揚援護庁、1950年)
- 横尾道秀『肝兵団戦記 肝7829部隊』(肝7829会、1975年)
- 厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』(ぎょうせい、1978年)
- 旧浦賀地域文化振興懇話会編『浦賀港引揚船関連写真資料集』(横須賀市、2006年)
- 戸津井康之『終わらない戦争 復員船「鳳翔」“終戦”までの長き航路』(二見書房、2023年)